

デイスカッション

杉本紀子 人文学部教授

酒寄進一

人間関係学部助教授

永澤 峻 人文学部教授

井上輝子

人間関係学部教授／司会

司会 それではデイスカッションを始めます。まず、本学の三人の教員から議論の口火を切っていただけ、問題提起者の方に簡単に応答していただいて、その後全体の討論に入りたいと思います。それではフェミニズム・ジェンダー研究会の世話人である酒寄進一さんからコメントをお願い致します。

酒寄 僕はこれから始まる熱いデイスカッションの口火を切らしていただくに当たって、『身体表現とジェンダー』というタイトル自体に立ち戻りたいと思うんです。

「身体表現」という漢字、しかも四字熟語が並び、そしてその横にカタカナ言葉があった……。そしてこの漢字とカタカナというも

のの対比が単に意味だけではなくて形としてもあるのではないかと僕は思います。そして塩崎さんが図らずも「閨房」という言葉を使われ、先ほどそれを「ベッドルーム」と言い換えたのですが、「閨房」と「ベッドルーム」をイコールに取れるかというと、だいぶイメージが違いますよね。しかも塩崎さんはそれを閨房生活というふうに「生活」という言葉まで入れるのですが、例えばベッドルーム生活だなんて、皆さん言うことがありますか。たぶんないと思います。何かそこに大きなズレがあるんですね。そういう対比があつて、漢字とカタカナにはそういう意味がこもつて

いる気がするんですね。そしてジェンダーという言葉で僕らが今の社会を色々問いただそうとする行為の中には新しい思想、新しいものの考え方で今を捉え直そうという試みがあつて、その一方で身体表現というのはずっと長い僕らの人類の歴史の中で行なわれ続けてきたものです。そういうアルカイックな部分を僕らはジェンダーという視点からどう照明を当て直せるのか、ということがおそらく今日の問題だろうと思います。

初めにジェンダーについて、肉体としての性の差ではなく文化的な社会的なところで規定されたものである、ということは井上さんからお話がありました。だいたいそれで共通項は作れると思うのですが、身体表現とは一

体何なのかということとは僕はいまだに疑問な
んです。

「表現」という言葉はとりあえずおくとし
て、問題は「身体」という言葉です。からだ
のことなのですが、この「体」という言葉を
使った熟語として二つくらい想定できると思
うんですね。一つはこの「身体」なのですが、
もう一つは「肉体」。肉体といいますが例え
ばマリリン・モンローなんかがいて、肉体派
女優という言い方がありますが、身体派女優
といったらちよつと奇妙ですよ。同じ「体」
なのですが、肉体と身体というのでは何かの
ズレがある。さらに「体」という言葉を引い
て、「身」とは何なのだろうということです
が、やはりアルカイックなんです。例えば
「身を固める」という言葉がありますよね。
結婚する。学生たちは身を固めるなんて言葉
使いますか？ たぶん死語に近いのではと思
うのですが。それから「身売り」……ちよつ
と危ない言葉ですが。「身売り」なんて言葉
もたぶん今使わないと思うのですが、塩崎さ
んどどうでしょうね、僕は自分では使ったこと
はないのですが。やはりこの「身を売る」、
これも例えば身と肉とを同じだといって「肉

売り」といったら全然違う意味になってしま
いますね。あるいは「肉を固める」といつた
ら、かなりやばい話になってくるという、そ
ういう意味の違いがあると思うんですね。

それから「身繕い」、身を繕う。「繕う」つ
て裁縫の時の言葉なのですが、これは結構大
事な言葉だと思えますよ。僕は今日の摂食障
害のことで考えますと、ピアスなどは最近男
性でも多いですし、入れ墨が少女たちの間で
流行しています。勿論、シールみたいな入れ
墨ですけれども。先ほど自傷行為と浅野さん
はおっしゃっていました、そういった傷つ
ける行為に走るといのは何なのだろうとつ
すごく気になっているんです。「繕う」とい
うのも再生行為ですよ。どこかに傷口がで
きたときにそれを繕い直すという意味です。

その他にも、ある行為は「身になる」であ
るとか、また、お母さんから裁縫の道具を貰
って何か色々作ってみると、何か社会生活で
「身につく」ことがある。「肉」につくではな
くて「身」につくという時に、そこには実際
に自分の体に何かが付くのではなくて、生活
であるとか社会であるとか何かに自分が機能
できるという意味合いがあるんですね。そう

いう意味で「身」という言葉の中には、単な
る肉体というだけではなくて社会との関わり
の中で意識されていく自分の体というよう
な意味合いがあるのではないかと思います。

もう一つ、気になるのが「身だしなみ」と
いう言葉なんですね。「身」はとりあえずい
いにせよ、「たしなむ」という言葉、これを
もう少し言い換えると、そこらへんでいたず
らしている小さい子がいたら、「オイ、お前
そんなことしたらダメだぞ」と言うことを
「たしなめる」って言うでしょう。語源が同
じかどうかは知りませんが、イメージとして
重なっていて、「たしなむ」という言葉には
自己規制の要素が入ってくるのではないかと
思うんですね。そして自己規制も単に自分か
ら選んだよりも社会の中でこういう約束だか
らということ、たしなめるものとして、つ
まり自分の身体というものがたしなめられて
いるというのが実は身だしなみで、僕らの服
装というのもそういう社会の制約、あるいは
浅野さんの言葉を借りると文化規定の中で起
こっている行為なのではないかなと思います。
それから「身」という漢字はそのまま使わ
れませんが、今の子どもや若者の文化を

見ていて気になるのが「裸ぎ」という言葉なんです。少し古い言葉ですけど「身」を削ぐんです。少女論というのが八〇年代以降だいが流行りましたが、その中で「少女は巫女である」論のようなものが出てくるんですね。その例が八〇年代半ば頃流行った朝シヤンであるとか、その他自分の体をきれいにしたい、浄化したいという行動に民俗学的な視点から巫女というイメージを重ねていくんです。そしてその先にあるのが「裸ぎ」なんです。それは中身としては身を削ぐということ、切り刻んでいく行為なんです。

フェミニズムの観点から考えると、昔から女性には女性特有の服装の文化があり、例えばコルセットの問題など、それを脱ぎ去るということが、男の側の女性観から脱出するという意味を持つてた時期があったと思うのですが、それが今は服だけでは済まなくなつて、身体まで自由になりたいという行為がやはり自傷行為に繋がっているということがあるように思うんです。その他傷つける行為、そこが今すごく逆説的になつていてのではないかなと思います。自分をどんどん否定していくことでしか肯定の道がないんです。

そういう関係で、浅野さんの本を読んでいるときに思つた小説があるんです。一九九〇年に書かれた作品で、主人公が一七歳の女の子で、タイトルが『ぼくはかくや姫』。「かくや姫」には僕らの共有できるイメージがかなりあると思いますが、『ぼく』と名乗っている女の子、『ぼく』という言葉自体が男の子の文化を背負っているのにそれを敢えて選んでいる女の子たちがいるというのが話題になつた時期があります。『ぼく』と名乗っている子が最後に「わたし」に行き着くという過程を心理的に描写した作品なんです。その中で繰り返し言われているのが男でもなく女でもなく、あるいは大人でもなく子どもでもない「わたし」に行き着きたい。それは無色透明で、誰から見られても中が透き通つていて、つまり自分の実態、身体が見えなくて通り抜けてもらえるような透明な自分を保ちたい、それが最終的に『ぼく』という名乗りにつながる、という話になつていのです。

この作品が僕にとつては特に摂食障害を絡ませた身体の問題の核心をついていて、今の若い人全員とは言えないと思いますが、そこに何か気づき始め、そこにこだわりたい

と思つている人たちが行き着く方向を指し示しているような気がします。摂食障害や傷つけるということもそうですし、その先には浅野さんのコメントにもあつたと思いますが、キーワードとしては例えば浄化であるとか、自律性のある身体といつているところが、この身体の問題とどう絡むのかということが僕はすごく気になつていことなんです。それはピアスもそうですし、入れ墨なんかそこに絡むのではないかと思ひます。

司会 それでは次に物語研究会の世話人、杉本紀子さんに同じく企画グループの一員としてコメントをお願いします。

杉本 コメントーターというのは初めてなので何を言つていいのかわからないんですけど、コメントというのは触媒だろうと、これから後でフロアの方から色々な意見が出るためまずは呼び水だろうと思つています。前もつての打ち合わせでは私は塩崎さんの発表に対してコメントをするということでしたので、ちよつと申し上げます。

私は日本文学の専門家でもないし、谷崎の専門でもありません。そこで、女が『鍵』を読んだらどう読めるか、ということの二つの

例として申し上げたいんですね。私が一番最初に『鍵』を読んだのが高校生の頃でして、ほとんど出てすくの一、三年たった頃でしようか、色々な性描写が描かれ、しかも中年の男女の夫婦生活を書いたものである、ということであつたと覗き見的に読んだんですが、最後まで読み通せなかつた記憶があります。

今度何十年かぶりに読んでみて、やはりあまりいい感じは受けなかつたんです。高校生に読んだ印象とは違ふんですけれど、一つは夫が妻を裸にするのはお酒によつて意識を失つて無抵抗の状態である、それをベッドの上で蛍光灯という新しい、普通の電灯よりもかなり明るく人工的に見えるところで素裸にして前だの後ろだの全部見るといふ、それはほとんど死体を見ているように、死体を検査するように見ているのです。本の中にも「マルデ死骸ノヨウニ」と書いてあるのですが、それから先ほど塩崎さんは夫は妻の身体の中に何も読みとらないとおっしゃつていましたけれども私は、夫は妻に年月とか老いとかを見ることは拒否している、つまり人形として見ているのではないかと思うんですね。膚が染み一つないという、純潔だというのは

人形としてみているからなのではないだろうか、死体として見ているのではないかと思ひます。つまりネクロフィリー、死体を見ると性欲を感じるというのと、私にはほとんど同じに見えてしまつて、それが一つ気になります。

ところが妻が夫を見る視線もこれとほとんど同じなのです。夫は四月一七日に発作を起こして五月二日に死んでいくのですが、やはり夫が寝たきりの死体同然の時に初めて妻が夫を見るんです。夫は妻のことををO脚で西洋の女性の様ではないけれど、僕はそれが好きだと言つてはいるのですが、それと同じように妻が夫をガニ股であると見る。また夫は妻の膚を今、申し上げたように「一点ノ汚レモナイ素嗜ラシイ裸体」と見ますが、一方、妻は夫の膚を「肌理の細かい、アルミニウムのようにツルツルとした皮膚」と形容します。これは夫が妻の膚に対する認識と同じではないか。ただし、評価は全く逆ですけれど。つまり夫と妻は、ほとんど並行関係を持つてゐるのではないかと思ふんです。『鍵』における夫と妻は、男女というお互いに対等の他者として存在しているのではなくて、夫は妻を

そのかして自分が見たいように見る、また、妻も夫に従うように見せかけながら実は夫の欲情を充たすためにほとんど夫と同じことをする。最後は夫を死に至らしめる訳ですから妻の方がはるかに悪辣なのですが……。

夫の日記には鍵が付いてはいるのですが、妻に盗み読ませるようにわざと落としてあつて、妻は夫の生前は、夫の日記を「読まない、読まない」と書き続けるのだけれど、夫が死んだから実は見ていたんだということを告白するんです。四月一七日の発作までは妻の日記も夫が読むことを前提とし、夫の日記も妻が読むことを前提に書かれています。そうしますと夫が妻を古風な女だというのはやはり一つの布右なのではないか。夫はそういう貞女に、女性を裸にして意識のないまま、ほとんど死体と同じような状態で見たりいたずらをする。殊に相手を弄ぶ。つまり物として扱つてゐるという性的悦びを感じるので。

夫が倒れて知的活動ができなくなつた一七日以降、妻は夫の日記と自分の日記とを突き合わせて、実はこうであつたと実態を明らかにしていきます。その辺りの一連の出来事の総括—女に理性的な総括は出来ないなどと言

うつもりは全くありませんけれど。事態を分析し、評価をするという作業に私は非常に男性的視線を感じます。谷崎としては、妻と夫の閨房生活の総括を妻にさせている、夫の代理をさせているという心積もりがあつたのではないのでしょうか。そういうこともあつて私は夫と妻というのは異性とは認めなかつたんです。

むしろ私が気になつたのは娘の敏子、明敏の敏です。敏子はもちろん誰からも見られる対象ではなくて、一方的にお父さんとお母さんの閨房の秘事を覗き見る存在であり、お母さんをそのかして木村という夫の傀儡のような男と性行為を行なわせ、お父さんが発作を起こした時に妻の日記を探してこいと頼まれるとお父さんの使い走りをしていられるんですね。ですから父の側にも立ち、母の側にも立っているけれども、彼女自身はそういう意味では異なる存在として位置づいています。彼女の部屋には鍵がかかつています。鍵というのは夫の日記の鍵でもあり、敏子の部屋の鍵でもあるということから、両方とも鍵を持つているということは対等なわけで、そうするとこの世界の中で他者というのは敏子な

のではないかと思うのです。谷崎は敏子を若い世代として描いているんですね。異質な、不気味な妻は娘のことを私以上に陰険であると言っていますよね。そういう意味では、敏子は不気味な他者として二人から見られていて、夫と妻の間を往き来し、双方の特性を持つ存在としてある他者なのではないかと思うんですね。

そういう意味でこの小説は夫と妻の閨房の話というよりも老と若の世代の対比と読めると思います。結末の妻の不安（いづれ敏子が夫と同じように木村との間に自分を介入させるのではないかという）は読む者を陰湿な悪循環に陥れずにはおきません。でも敏子は確かに陰険ですから新しい世代、新しい女性のタイプとは見たくないのですが、塩崎さんのおっしゃるように、谷崎が旧道徳のイデオログというふうには私には読めませんでした。感想や反論をお聞かせ下さい。

司会 『鍵』の読み方は色々あると思うんですが、塩崎さんの読み方と杉本さんの読み方と、また、会場の方々から色々な読み方を聞かせていただけたらと思います。それでは次に永澤さんからコメントをお願いします。永

澤さんはやはりこの企画グループの中のシンボル文化研究会の世話人でいらつしやいます。永澤 私は笠原さんが提起した冒頭の写真・絵画における身体表現の問題へと立ち戻るとともに、最後の浅野さんがお話しになつた内容と重なる問題を、テキストを紹介しながらコメントしたいと思います。最近の新聞で見たプリクラについての短い文章と、笠原さんの議論の前提になる「人の（かたち）人の（からだ）——東アジア美術の視座」（平凡社）というシンポジウムをまとめた本の一部をプリントでお配りしておきました。これを参考にしてコメントしていきたいと思います。

私が古風な人間なのかもしれませんけれど、笠原さんの女性の過激なヌード写真をめぐる問題提起に始まり、塩崎さんの「閨房」の分析を経て、浅野さんの身体の具体的調節のあり方の現状、というように、インフレーションを起こしていくぐらいに、過激な言葉が出てくるようになったことを若い人たちがどのように感じたらつしやるのかなと思いが、もう一つ別の視座からの映像論があり得るのではないかと感じたのです。これは先週の日曜日の朝日新聞なのですが『ふむふむぶ

んぶん」というコラムの「プリクラにはまる」という、高橋なお子さんという作家が書かれたテキストがありまして、短いものですので紹介しておきたいと思います。

「私の夫は写真が下手だ。なので結婚式の写真を最後に私が写っている写真の枚数は激減した。家族はふたり。私を撮る人はいない。反対に写真が大好きな父に写真を撮られまくって育った私は家族の写真を撮るのが習慣になつていく。その結果夫は結婚以後突然多量のスナップ写真を所有することになった。自分の写真というものはなんとなくうれいものである。何年も経つと自分でも意外なくらいに懐かしく、撮ってくれた人のことを優しい気持ちで思い出したりする。けれど撮ってくれた人のことを記憶できるような年になると写真の枚数は減っていくものだ。親だつて子どもの写真を撮らなくなる。写真は時に心の中まで写すもの（これがキーワードになると思うんですけど）だから。カメラを通して相手をのぞいていたり、相手にのぞかれたりするものが怖くなるのかも。ところが写真を撮られなくなるとそれがとても淋しい。誰も自分を見てくれないと感じる淋しさである。

二度と来ない今日という日の自分を誰かに撮ってもらいたいと焦る若者たち。わかるなあ。私結婚してから全然写真が残っていないから自分が存在していたという証拠がまるでないような気がするもの。女優たちが写真集を出したが。時に裸になってまでカメラを向けてもらおうとするのも淋しいからなのかもしれない。かくして、人々はプリクラにはまったのである。誰に心を覗かれることもなく、納得のいく顔をつくり、それを自分で撮つて人にも渡す。自分がその時確かに存在したという証拠を自分で作つて大事に抱えて生きるのだ。ナルシスティックな自分への愛を満たし、孤独を癒す笑顔のシールがつくるさびしがり屋の写真集は全て自作自演の自費出版である。」

クールでもつばらナルシスティックな視線からの身体表現の問題に立ち戻つてみたらどうなるのかということ、最新のプリクラという現象に即して紹介してみました。

そして次に長い文章ですが、お帰りになつて読んでいただきたいと思えます。「ヴォワイユール (voyeur)」、覗き見という概念を新しい美術史、或いはイメージ文化全体を考え

る際にキーワードとして、日本でも何度もワーク・シヨップをやつたノーマン・ブライソンという人のです。剥ぎ取られた裸体をネイキッドといい、美しい裸体をヌードという言葉で定義した有名なケネス・クラークという美術史家がいまいますが、その人の視点をもう一度ここで新たに問い直すということで、先ほどの覗き見にあたる独特な視線を「ゲイズ (gaze)」という概念から捉え直した研究者です。ノーマン・ブライソンは、日本の洋画の始まりの時期に、パリへ行つた画学生たちがヌードモデルをどのように描いていたのかということの問題としており、私はここでの議論での歴史的な出発点を確認したいと考えました。

今言つた、視線のポリティックスということは笠原さんの問題提起でも核になつていくわけですし、私ども日本人がこの分野の議論をする際に、いわばこのポリティックスが「視線の刷り込み」とされながらも、現象面での言葉だけが過激になつて使われていると感じ、この点を明確にしたかったわけです。あとのブライソンの論文ではごく自然にみえる黒田清輝の「読書をするヨーロッパ女性」

の油絵の図版の下に、これはジェロームという画家のアトリエの女性ヌードや、オリエンに設定した上で女性の裸を覗き見するところから始まり、次の図版を見ていただきますと、物語性を削られて、単に野原に横たわっている女性というように段々文化的なもの剥ぎ取られていった経過がわかります。

ちょうどこの時期に留学した日本の洋画家たちはどういふ存在だったのかという貴重な写真が残っています、パリでヌードモデルを囲み日本の画学生たちがこういう形で修業をしていた。西洋に追いつき追い越せという時代の流れの中で、裸体画を見ていく視線とこのでしょうか、こういう刷り込み現象が私たちの中にひよつとしてあるのではないかということ、時代を少し遡って浅野さんと笠原さんが話された起点になるものと、プリクラという一番新しい現象、そこではナルシスティックなのかもしれませんが、意外に軽やかな感じのする今の若者たちの身体観、この二つの点を紹介しながら振り出しに戻し、皆さんの質疑の叩き台になればと思い、コメントした次第です。

司会 今三人の方からそれぞれコメントがあ

りましたけれど、一對一という形ではなくて三人のコメントについて発表者の方々からそれぞれ補足やご意見があればお願ひしたいと思います。ではまず浅野さんの方から順にお願ひできますか。

浅野 鷲田清一さんが人間大学で始めた『ひとはなぜ服を着るのか』という講座の中でピアスとか入れ墨のことを書いていたんですけど、親からもらった肉体に傷をつけていく、それによつて自分が軽くなる……。本当は傷つけてはいけないと、親あるいは社会から教えられてきたものを傷つけることによつて、社会規範なり家の伝統なり自分を縛っているものから自由になつていく感覚があるんじゃないかなと思います。

もう少し摂食障害の人の具体的な話をしますと、浄化というのは本当に自分自身を浄化していくということですね。単に行爲というのではなくて、食べ物をお腹に詰め込むというのはお腹の中に汚い物がドロドロとたまつていて、それをバーツとまた出すのが非常にしんどいことなのですが、人によつては快感なんです。私がお配りしたインタビュウの資料を見ていたくださいね。

「過食をして御飯をもどしちゃうつていうのは、なんていうのかな、自分が『いい子だ、いい子だ』といわれつづけて、体のなかにたまつたドロドロの気分みたいなものを、たべものといつしよに出しちゃうような、そういう一種の爽快感があつた、そのころは」というふうな過食嘔吐をかつてしていた女性が語つてます。

最近お話を聞かせて下さつた女性ですと、その方は結婚していて、姑と同居しているんです。夫は一人息子で、自分はその夫を非常に愛していると言つてます。でも愛している夫を産んでくれた義母なのに愛せない、姑が大嫌いだとも言つてます。彼女は過食嘔吐しながら、その時だけ「鬼婆ター」と叫びながら吐き戻すんですね。一方で彼女は非常にガリガリなんです。彼女の理想は華奢な、透明な少女なんです。あくまでもきれいで透明な自分でいたいです。だけど愛している夫のお母さんを愛せない自分、「鬼婆ター」つて言つてしまふ自分は汚い自分で、そこが非常に分かれてしまつていて、受け入れられる自分と受け入れられない自分とに分裂して、ある意味で過食嘔吐がそれを繋ぐ、と

言つたらわからないんですけど、そういう行為として存在し続けているんですね。

また、Dさんという女性がいます、彼女は冷蔵庫の中のを全部食べてしまうほど一度にすごい量を食べるのですが、それをまたパーツと出してしまうのが非常に楽しかった、と言っていて、隠れた行為でそういうことをやっているのが楽しいという場合もありますし、逆にAさんという女性は朝目覚めた時に「またこの世界に来てしまった」という感覚を過食していた大学生の時に持っていたと言っています。目が覚めるとパニックに陥ってしまった、それを抑えるためにタバコを吸うとか、「朝のヤケ食い」と彼女は称しているのですが、朝にパーツとヤケ食いし、彼女の場合は吐くのではなくて下剤で流すんですね。浄化させるんです。それをやると、安定感が得られ、この世界にもう一度戻つてこられるという感じがして、一つの世界と自分の身体を取り結ぶ回路として使っていたんです。彼女は日常において混乱する時とか物事を決められないときには必ず過食浄化をすることで決断をしていたと言っているんです。

そのことと先ほどの自分の身体が軽くなる

というのとどう結びつくのかはわからないんですが、日本でウーマン・リブが七〇年に銀座で旗揚げしたわけですが、ウーマン・リブ——とり乱しウーマン・リブ論（河出書房）という名著を書かれていますけれど、そこではドロドロとした感情や激情をすくく表出させている。とり乱しつ、とり乱しつ、とり乱しつ、矛盾は矛盾として受け止めて、論理一貫性を拒否しても良いという感覚だったんですね。そういった感情を出すということが段々となくなっているという気がするんです、若い人を見ていると。ボディピアスをする人とか、入れ墨のシールでもバーコードの型が紹介されていましたが、自分にバーコードの入れ墨シールを貼って、ある意味で自身を商品として提示すると言うか、商品になることの軽やかさがあるのだらうと思うのですが、私がインタビューした摂食障害の人はまだそこに抵抗があるというか、そこまではいっていないのかなという感じがして、今の若い世代の人たちの身体感覚というのはそういうものを通過した以降の身体なのかという感じもしますが、軽やかでいいのか、非

常に希薄化して言葉がないのか、それをどう評価したらいいのかわからないです、私には。

塩崎 杉本さんにお答えしなければならぬのですが、その前に酒奇さんが身だしなみということをおっしゃった。おしゃれと身だしなみということとはたぶん違っている。『鍵』の中にも身だしなみという言葉は出てくるのですが、身だしなみと言う言葉はおそらく既にある、公認された、既定の身の振る舞い方に自己の身体を合わせていくことだ、というふうに私は位置づけたいと思っています。ですから『鍵』の妻が夫に、あるいは父母に教え込まれた身の振る舞いをなぞることを彼女は身だしなみと言っているのだと思っております。「身体で」「身体を」というところが、作中人物たちはそれぞれに「身体で」表現をするわけです。『細雪』の四姉妹たちはそれぞれの身だしなみを整えることによつて、たとえば父母の法事に出かける場面がありますけれども、長女は薄色の一越縮緬、次女のさち子はもう少し濃い色の一越縮緬である、というように長女から四女までが家長規制の中で、あるいは長幼序列の中でそれぞれ

に自分の身丈に合った形で身体を表現して
くんです。そういった作中人物たちを通して、
作家は身体を表現していくのだと思っていま
す。たぶんそういう形で、「身体で」表現す
るということと「身体を」表現するといふこ
とは言語表現の中で、あるいは文学表現の中
でクロスするのだと思っています。

杉本さんのコメントに関して申しますと、
読みのすれ違いがいくつもあります。まず
『鍵』について申し上げますと、鍵自体は夫
は書斎を持っておりまして、その書斎で日記
をしたため、袖机か何かにそれを収めて鍵を
かけるんですね。妻は茶の間で夫の目を、あ
るいは娘の目を盗んで日記を付け、へその緒
書きや由緒書きなどが収まっている鍵のかか
らない用筆筒の引き出しに入れるんですね。
タイトルの『鍵』には鍵を所有している者として
いない者との価値序列が既に含められて
いるということなんですね。そこで娘の敏子
が部屋中に鍵をかけるということをおっしゃ
って、そうするとまた作品の読みが変わって
くるかなと思っただけですが、今日ばかり
あえず先ほどから費用しています閨房生活を
前に押し進める何かという形で娘の敏子とそ

の許嫁である木村はこの作品の中に挿入され
ているので、彼女たちにある役割を読むとい
う方法はとりませんでした。つまりきつかけ
だと受け止めました。

それからネクロフィリーについてはおつし
やるとおりです。ただそれは死体愛好なのか
日本の文学において、一九五〇年代の春本と
か地下出版とかいうマイノリティではなくて
新聞や雑誌、単行本という形態をとる小説表
現の中で女性の裸の身体、あるいは妻の裸の
身体というものをネクロフィリーという形で
しか書けなかったという時代的な制約という
ようなものを、一方に私は考えております。
ただ、問題なのは、結論の部分で申し上げた
ように、脱がせることではなくて、いったん
脱がせておいた上で、男の身勝手な文化規制
を、「女の道」とかいう演歌などでも愛好さ
れているような文化規制を無理やり女に着せ
かけることだと思っただけです。ですから死体愛
好と言う方向へダイレクトに拡大していくと
ちよつと違うんじゃないかな、と。そこは意
見の分かれるところだと思います。

笠原 ノーマン・ブライソンさんの『人の
（かたち） 人の（からだ）』の中の論文を永澤

先生がコメントして下さったので、文字につ
いては後で読んでいたいただきたいのですが、私
が最初にお見せした作品を見た後に、ここに
表れている裸体像を見ると非常に安心すると思
います。特に二番目の、留学生と裸体モデ
ルは非常に象徴的だと思ひながら見ていたの
ですが、こういう形での一対一の人間関係で
あるとか一対一の女性の身体表象ができるわ
けがないとよくわかりますね。先ほど塩崎先
生がネクロフィリーということを書いておら
れました。「ネクロフィリー」としか書けな
ったのではないかと申されたのですが、私
は谷崎は何回かトライしたのですが数ページ
で投げ出した口で、中身については言う資格
はないのですが、ネクロフィリーとして女性
の裸体、もしくは女性を書いてどこからも
文句を言われなかった、もしくはそのように
書いても世の中が自然に思っていたという社
会の認識の違いなのではないかと思ひます。
今そういう形で「書く」こと自体が問題にさ
れつつあるんですね。写真で言えば、先ほど
私が示したようなヌードは非常に少数派で、
ほとんどがネクロフィリーとして現代でも流
通しているものが多いです。それについて自

然に受け入れられている、もしくは顔をしかめながらも慣らされている方の意識の問題なのではないかと思いました。

もう一つは、これまで身体表現を三人で話してきているのですが、全く出てこなくて不思議だなと感じていたキーワードがあるんですね。それは、この話をしている時に私たちはヘテロなセクシュアリティを前提にしてしまっている、という不思議さなんです。勿論『鍵』もそうですし、去年ジエンダーの展覧会をやった時に私はかなり意識して、そこまではできないと思って入れなかったのですが、『Women Eat Large』はレスビアンのカップルのお二人の作品なんです。カミングアウトしているわけです。どうしてそこをどうやらんと言ってくれなかったのかと非常に文句を言われたことがあります。私たちが当たり前にヘテロな関係で男と女を前提にして話をするのはおかしい、男と男、女と女、そしてそれ以外の関係も当然あり得るものとして同等に扱っていかねばならないのではないかと、特に身体表現をする時にはセクシュアリティの問題は避けて通れないんじゃないのかな、というところを感じていましたので一言言ってお

きたいと思えます。

司会 今日のリポジウムでは色々な問題が錯綜してしまっていて、分野も、文学から写真表現から身体で自己をどう表現するかという現実の女性の自己提示の問題まで様々ですし、時代的にも五〇年代から九〇年代まで長い時代にかかわって、問題が飛び交っています。私たちはこのシンポジウムがどのような議論になってどのように流れていくのかということとはあらかじめ全く作っていません。色々な問題が色々な形で出されて、議論されて各自が自分の問題を発見できればいいのではないかと思えます。全くアナーキーな状態でここに臨んでおりますので、正直言つて私もどういふふう展開していくのかわかりませんが、ストーリーのないところでどうぞ皆さん自身にストーリーを作っていた方がいいと思えます。だいが長くこちらの方で話が進んできていましたのでジリジリしている方もいらっしゃるかと思えます。ご質問でもご意見でも結構ですので自由に発言して下さい。

参会者 大変楽しく拝聴致しました。司会の方がおっしゃったように非常に多岐にわたってかなり視点も色々ですから、私も先ほどか

ら色々考えながら壁に囲まれてしまったような感じですが、表現ということですからたぶん頭の中にあるものを外化するというところで表現していない部分も沢山あるかと思うんですが、その中でも結局脳の中にあるかなり人間的な論理性の高い部分の問題が中心になるかと思えます。先ほどから出ているピアスや入れ墨の問題は人間の脳のどういう部分が先行しているのか、あるいはもつと論理的な部分で割り切れる話なのか。そういうものが同じ次元で語られる時かなり混乱が出てくる感じがしました。特に最近の若い人は論理的な部分の脳を使うことばかりが学校や親から強制されていますから、本来の動物的な部分の感覚が疎外されている気がします。そういう部分がある日突然論理を飛び越えてぱっとそういう行動に出てしまったりすることが多いのではという気がしました。

司会 ピアスや入れ墨が若い人たちになぜこれだけ流行っているのかということに関する一つの解釈を出されたと思います。この問題について若い方々はかなり関心を持っているのではないかと思うのですが、ご意見ありますか。摂食障害の問題や若い人たちの身体の

文化についての研究をされている方たちも何人かいらしていると思うのですが、いかがでしょう。ピアスだけに限らずエアロビクスなどのスポーツについても身体へのこだわり、身体の改造ということで共通の傾向があると思います。いかがでしょうか。

参会者 私はスポーツ社会学を専門にしている者です。スポーツと言うと筋肉とか、先ほど笠原さんもおっしゃっていましたがギリシアの筋骨隆々というイメージがあるかと思えます。特にエアロビクスをやられている女性にインタビューをするのですが、痩せた身体といってもガリガリにはなりたくなくて引き締まった身体になりたいということを往々に聞きます。エアロビですと女性が多く、ハイクラスのスポーツジムやフィットネスクラブになると男性が増えてきますが、公民館などでやられているのは女性が多く、年齢層もばらばらですね。中年の方々は音楽にのって身体を動かすことで充分という感じですね。インストラクターの方は「老化現象は止められないけれどスポーツをすることによって老化現象を遅くすることはできる」と言っています。若い人たちが痩せるためにエアロビをや

つてはいるのですが、中年の方たちも「見られる」ということを意識して、女はあがつていないということを証明したいのかどうか、まだちょっとそこはインタビュしていないのでわかりません。エステになると年配の方は少なく、若い女性が多くいらっしやいます。というのは、OJさんたちはお金と時間にも余裕があり、若い方が多いと思うんですね。エアロビをしている方たちは摂食障害やエステに通っている人たちを、楽をしてやせている人たちだと批判するんですね。実際は楽ではないと思うのですが、楽をしているということと健康的ではないということを必ずおっしゃいます。

笠原 私も実はいまエアロビにはまっていて、時間があると行っています。肩凝りなので、マッサージや鍼に通っていたのですが四〇に近くなつて、ずっとマッサージと鍼を続けるのは嫌だな、やはり少しは自助努力でやっていかなくてはならないとエアロビを始めました。多少はやせたいですけど、実際は一キロもやせていません。痩せたいという動機ではなくて、例えば写真やアートに結び付けますと、女性の表現が出てきた時に自分自身が

ヌードになること自体が一つの主張であったり、パフォーマンスにしても身体で何かを表現すること自体が新しい表現になっているということがあります。身体的な快樂と言いますか、汗をかくとすごく気持ちいいんです。私は、学芸員という土農工商の下にその職があるような、女工哀史のような状態で働いていますから、身体は疲れきっているのだけど、身体を動かして汗をかくという状態、つまり身体的な快樂が現代社会においてエアロビやスポーツクラブがはやる原因なのではないのでしょうか。私に通っているところにも私のような中年の女の人やそれ以上の方もいますし、男の人も多いです。中年の男性も老年の男性もいます。だから身体の表現において快樂的な要素もすごく大事なのではないかと思っただけです。自分の頭ではまとめきれないのですが、ジョギングなどアメリカでもはやっていますけれど、そういうことがかなり大事な要素なのではないかと思えます。

司会 エステに行つたことがあるという浅野さんはどうでしょうか。
浅野 私は瘦身コースを試したのですが、あれはすごくしんどかったですね。サウナに初

め一五分入れられて、揉み出しはすこく痛か

ったですし、ホイルに包まれて保温されると自分がお料理されているような感じだったです。身体というよりは肉体という感じを意識しましたね。パチパチと叩かれたり温められたりして、ふらふらになって意識を失いそうにもなりました。それは私にとつてすこくハードだったんです。でもエステでもアロマテラピーなどのリラクゼーションはもしかしたら気持ちいいのではないかなと思います。そういう意味では身体的快樂を得るためということになりますね。よく男性の行く一女性用もあると思いますが一性風俗なんかでも、ファッション・ヘルスとかファッション・エステなどと名づけていて、かなり身体的な快樂を得るという技術を言っていると思うんですね。そういう点では私はエステをつい男性の性風俗と比較してしまふんです。

司会 「身体を改造する」といつても、かなり苦しみを伴いつつ、改造しなければならぬという義務感とか自己管理意識によって行なわれる身体改造と、自分を発散させて身体を解放して身体的な快樂を味わうという、スポーツや身体を鍛えるという身体表現がある

わけですね。

参会者 今お話を聞いていて、二〇代など若い世代の人にダイエットで拒食症になることが多いということとはよくわかったのですが、三〇代、四〇代、またそれ以降の人もダイエットに関心を持っていると思うんですね。中年の人たちは単に見た目というだけでなく、健康を維持するために痩せる努力をしなくてはならないという部分があると思うんですが、若い世代の人のような拒食障害が起こることもあるのでしょうか。

浅野 先ほどご紹介したオーバックスは、拒食症が若い女性の病と表象されてきたこと自体作られてきたイメージで、若い女性だから未熟でそういった問題があるのだと言われているが、実際には年配の女性でも拒食障害になっているということを書いています。私が先日聞き取りに行ったグループで、北海道にある拒食障害者の自助グループは、メンバーの方が四〇代が多かったのですが、日本の拒食障害の第一世代の人たちかなという感じがしました。拒食障害になったのは二〇代の頃で、症状がずっと続いてきている人もいれば、途中で回復なさった人もいらつしやいます。四

〇代で突然拒食障害になったという人に私自身は出会ったことはないのですが、夫嫌悪症と言いますか、『婦人公論』に夫がぬれ落ち葉の状態になった時に夫が嫌で仕様がなくなつた高齢の主婦が拒食症になっているという記事がありました。

参会者 それは要するに見た目を変えるというよりは夫に対する不満から精神的に拒食障害になったということですか？

浅野 はい、そうですね。

塩崎 ぬれ落ち葉の話になりましたが、私なんかはまさにそうです。ダイエットのためにはタバコしか吸っていませんし、何にもできませんので、『鍵』はまさに妻が夫のインテリの色気のなさを暴いていて非常に身につまされながら読むというのがありますので、ちよつと発言をしたと思います。今問題になっている身体の快樂というのが自己完結的なんですよね。例えばエステに通い汗をかくことが職場のストレスに対する自己解放とか、ピアスで自分の鼻に穴を開けるということによるアイデンティティを確保するとか、それはひつくるめて非常に自己完結的なんですね。私は、友だちでもいいし恋人でもいいし

妻でもいいですけれど、相手の肌の温かみとか息の芳しさといった身体と身体との関係、肩を組んだ時の安心感とか嫌悪感といったものが今日の話の中で欠落している問題だと思えます。先ほどヘテロの問題に極限されているというご指摘が笠原さんから出されたのですが、もう一つはそういった複数の人間たちの関係の橋として身体を考え直せないかというのが敢えて発言した意味です。

参会者 《写真表現のなかのジェンダー》という題で発表された最初の方は、「女性の」「女性による」「女性を」表現したということでしたよね。谷崎の場合は男の人の目を通してた女の人といいますが、女の人の方は精神は全然なしでそれこそ身体表現だけという感じなのですが、『鍵』に関して私がお聞きした範囲ですと、妻は人間の女性というよりはお人形さんで、今までは衣装の着せ替えをしていたのだけどそれに飽きて着物を剥がし、中の肌を見たという感じしかなかったんですね。摂食障害に関してもやはり女性の場合はほとんどですよ。今「関係性がない」とおっしゃいましたが私もすごく感じています。男性側には「目」であるとか「見る」である

とかそれしかないんですね。身体表現というのは男性側の自分好みの女性の表現であって、女性も「見られる」というか女性である自分を使って表現をしているんですね。自分の身体のみくよかさや痩せたいという感情が先行してしまい、男女の関係性が全くないような気がしました。

笠原 裸体表現にとつては、関係性というのは一つのキーワードなんです。よく浮世絵などで女性が見ても不愉快でないものがあるんですよ、どんな裸体、どんなヌードであっても。写真においても同じで、ヘアが写っているとかが性器が写っていると縛りがあるとか何とか、何が写っているかというよりは何が描かれているかということなんです。

例えばステイグリッツのジョージ・オキーフを撮ったヌードの写真は全く嫌じゃありません。女性が自立した女性として描かれているんですね。それはやはり共同作業なんです、表現される方も見る方も撮影する方も見られる方も。作る側と作られる側—これは男と女の双方向の話だと思うのですが—の関係がいかにか成り立っているか、まさに関係性があるかないかで決まると思います。

もう一つ例を言いますと荒木経惟さんという悪名高き(?)写真家がいいますよね。私は荒木さんに対して非常にアンビバレントな立場です。と言うのは、荒木さんの緊縛写真は私は大変嫌悪するものです。ですけれども荒木さんの亡くなった奥さんである陽子さんを撮った『センチメンタル・ジャーニー』は本当にきれいな二人の愛の交流が描かれている、非常にいい作品です。同じ描かれ方をしても、同じ主題を扱っても描く側との関係性で全く違ったものが出てくるというのは非常に大事ななことだと思います。

司会 最初に酒寄さんが出された「肉体」と「身体」との違いという問題にちようど関わっているお話だと思います。写す側と写される側、或いは見る側と見られる側との関係性によつて作品なり表現なりの持つ意味が違ってくるということですね。確かにヌード写真は日本では八〇年代から次々に出て売られ、私も全部見ているわけではありませんが、見ている気持ち悪い、とても見たくはない写真と、見てそれなりに美しいなと思ったりすべいなと思ったりする写真があります。写す側と写される側、或いは写される側の主張や自

己というのはどれだけ滲み出ているのかというところで写真の持つ意味が違ってくるように思っています。

小関（人文学部教授） 関係性について考えてみたのですが、『身体表現とジェンダー』という看板にも関わってくる問題です。僕も物語研究会のメンバーでこの企画に少しは関わっていましたが、こういうことを言うのはまづいかもしれませんが、身体表現と身体という言葉が飛び交っていて、それで本当に関係性とか世界が捉えられるのだろうかという問題があるような気がするんですね。ある学問的な捉え方をするときには確かに身体ということはおさえなければいけないということはあると思いますけれども。例えば酒寄さんがおっしゃた「身」ということは市川浩さんが『身体の構造』の中で身というのは身内といった

ように常に関係性を含んだ言葉である、と。人間関係学部の三橋先生が「跳べない身体」という言葉である領域をおさえられるというような言い方をされています。「身」というとある種封建的な身分制度などの「身」まで含み込みますから「身」という言葉で何が押えられるかという点と難しい、危ない問題があると思います。身体表現というところではぼれ落ちる世界があるのではないかという気がします。具体例は時間の都合でやめておきます。

司会 予定の時間が過ぎ、外も暗くなってきましたのでそろそろ終了にしたいと思います。今日の議論の中で、近代社会の身体に関わって「見る／見られる」の政治学があるということ、それに反逆して見られる側からの新しい動きが芸術表現やその他の中で試みられて

いるわけですが、同時に多くの女性たち男性たちが「女らしさ、男らしさ」といった作られたイメージに自らがとらわれてそこに合わせなければならぬという意識を持たされて日々苦しんでいるという現実が浮かび上がってきたと思います。「身体とは何か」という根本的な事柄について問題が投げかけられたところで終わってしましますが、今後何かの時に考える材料にしていただけばと思えます。色々な問題が提出されたままでもうまく整理できませんが、皆さん、色々な疑問や意見やらお持ち帰りになって、是非この話の続きをどこかで誰かと語り合っていただけば幸いです。

今日はこんなに多数の方々、最後まで熱心に参加していただき、ありがとうございました。